Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2000.10.3
発行者：中島秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

Vol.17

CONTENTS

・ヨセミテ撮影紀行
・『ヨセミテ公園撮影ツアー』雑感
・人物撮影会（大倉山記念館）
・吉野光治郎さんの死を悼む
・インフォメーション

ヨセミテ撮影紀行

風景写真を愛する者なら一度は訪れて見たい場所、それがシエラネバダの西側に広がるヨセミテ国立公園だ。アダムスがあれほどピアノに打ち込みながら、写真家に転向するきっかけを与えた懐の深い雄大な自然の地、それがヨセミテである。大木の連なり、切り立つ断崖、広がる草原、川の流れ、ごう音の滝、巨岩の連なり、まさに自然が作り出した美しさに満ちている。これらを求め毎年400万人もの人々が訪れる世界的に人気の高い公園になっている。

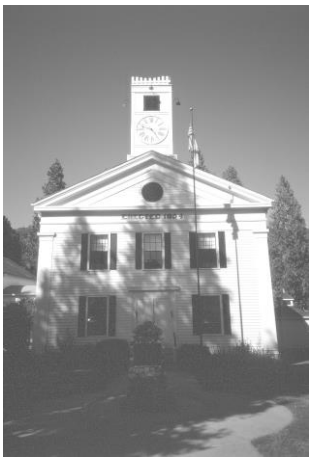
面積はおよそ3079平方キロで東京都の1.5倍もの広さがあり、さらにアンセル・アダムス・ワイルダネスとして東側にそのエリヤは広げられている。このヨセミテ国立公園には二つの顔があり、一つは都会の喧噪で疲れた人々の心を解きほぐし、訪れたすべての人々を受け入れてくれる優しい渓谷と、3000mの岩山が続くシエラの圧倒的なパワーを見せる山脈の連なりに分かれる。今回の研究会撮影ツアーは、この両方を経験することになった。6月1日‘写真の日’に我々は出発した。

6／1　3.4リッターのポンティアックのミニバンは、我々5人と撮影機材満載にもかかわらず、5車線のフリーウエーを快調に走る。4200 マイルほどしか走っていない新車同然のダークブラウンの色は、これから向かうシエラの渓谷にピッタリ。しかし、60マイルのスピードで道路確認と車線変更はある程度の慣れが必要で、飛行機から降りてほぼそのままフリーウェイに入った我々は、走りながら以前の経験を呼び戻し、とにかく慣れるしかなかった。録に囲まれた住宅街をあっとゆう間に抜けると、そこは延々と広がる牧草地帯に変わる。日本とは逆に6月は乾期で牧草はすべて枯れてしまい、黄金の草原地帯と見えなくもないが人影は見えず牛も遥か遠くにいるだけで、見続けることに耐えられない広大な牧場が続いている。ここで生活しろといわれれば、何かぞっとするものを感じる。脇目もふらずただひたすら目的地まで走り続ける、これがアメリカンハイウェーの走り方に違いない。車窓の光景に浸るなどという言葉はここでは通じない、おもしろいものがあるからちょっと止めてといっても車の流れが許してくれないのだ。移動は素早く現地ではゆったりと、これがアメリカンアウトドアのスタイルなのだろう。
とにかく我々の目的地はまだ遥か彼方だ。

小高い丘の連なりに鉄塔が見えてきた、近かづくに連れてそれが異様に見えてくる。自然環境にうるさいアメリカがよくも許したと思えるほど、風車発電の鉄塔が数え切れないほど立っている。視線をさえぎる物は何もない急傾斜の山頂に、高さ30mほどの鉄塔と3枚の羽からできていて、その下に牛がのんびり横になっている。これが延々と続いている。我々は車をとめ、このあきれた光景にただ茫然と眺めるしかなかった。バイオやゲノムを生み出すこの国で、この奇妙な風車の連なりの合理性は何なのか。まさかエコロジカルな取り組みを、国民に世界に示すポーズではないだろう。しかし、なぜかほとんどの風車は止まったままで、実際の発電量はたいしたことはないだろう。風が吹けば元気よく回り始めるのか、それとも修理中なのか、そのコストは大変なものだ。現代アートにアースワークというジャンルがある。大地に穴を開けたり、巨大なビルを布で包みロープでしばったりするもので、一定期間が過ぎればまた元の形に戻す。日常の光景に非日常性を持ち込むことがテーマになっていて、そのジャンルで有名な“クリスト”という作家がいる。彼のアートを考えれば、等間隔に並ぶ風車塔は立派なアートに見えて不思議はない、またそう考える方がずっと楽だった。

140号線にようやく出た、通称ヨセミテ街道といわれ、真直ぐ行けばヨセミテ渓谷に出る。ここか

ら片側一車線の狭い道だ。道の両側は延々とオレンジ畑が続き、しばらくしてパステルグリーンの樹林帯に入っていく。最初の目的地はアダムスが撮影した裁判所のあるマリポサの街、この先ヨセミテ公園までこれより大きな街はない。商店とロツジ、学校や教会もあり生活に必要なものはすべてそろっている。道路から少し入ったところに真っ白な裁判所があり、今は博物館になっている。ここが気に入っている理由は二つあって、アダムスが撮影した場所であるのと、時計台があることだ。

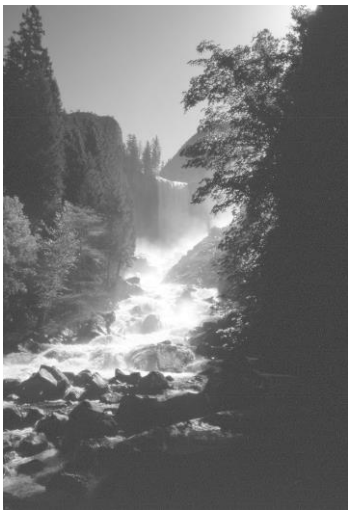


そして、この時計の文字はギリシャ数値でかかれていて、アダムスのゾーンの数値はここの時計台がヒントになっているのではと、私は密かに思っている。ただし時計台の 4 時はⅣではなくＩＩＩＩになっているところがまたおもしろい。長めに刈られたアメリカン・グリーン・グラスが白い建物をさらに美しく見せ、私はただ眺めているだけで満足だった。

セダー・ロッジについたのは 7 時を回っていた。チェックインを済ませ、休む間もなく我々はヨセミテ公園に向かった。すでに日は落ち柔らかな光に変わっていた。サンフランシスコに着いてから一日中強い光にさらされていた我々にとって、ほっとする光でもあった。道路の脇を流れるマセード川は雪解けの水をたっぷり受入れ、流れは早く川というより滝にちかかった。場所によって川に降りることさえ危険を感じた。3 年前の洪水で橋やロツジが流され、その水かさは堤防を越え１．５ｍまで増えたという。夕闇につつまれた公園内は車の走りや人の往来は少なく、木々の間からキャンプの光がわずか見えた。しかし、ヨセミテビレッジにはまだ人の動きがあった。ここは公園の中で最もにぎわうところ、ロッジ、レストラン、郵便局、ビジターセンター、そしてアダムスギャラリーがある。我々は明日の食料を買い、地図を買った。私はレストランを捜したが、すでにオーダーストップになっていた。一回りしてセダーロッジに戻るときはすっかり暗くなり、車のヘッドライトだけがたよりだった。公園を出てロッジまで２０分、ロッジのレストランバーはまだ開いていて、我々はピザとビールで乾杯した。日本を発って仮眠だけでほぼ 24 時間動いていたことになる。私はそれほど疲れは感じなかった、ヨセミテにいることの興奮が疲れをにぶくしていたのかもしれない。我々は互いに今日一日を語り合った。そして、明日 6 時出発を確認して、それぞれの部屋に分かれた。私と山下氏、古川氏と木下氏、そして松本さんは一人部屋になった。

私はフィルムの整理や明日の予定を練ったり、日誌をつけたりした。山下氏は持参したボトルを開け、ちゃっかりナイトキャップをやっていた。私がシャワーから戻ると、すでに寝息をかいていた。

6／2　ここバーナル滝まで、公園から３Km ほど山道を登ってきた。まだ早すぎたようで滝は日陰だった。今年はことのほか水量が多く、激しい勢いで流れ落ち周辺に水煙を巻き上げている。カメラを向ければレンズはびしょぬれで撮影は難しい。ここから迂回してバーナル滝を越えると、その先にはネバダ滝が待ち構えている。このシエラの山に体積した雪は春になると解け出し、水は山に染み込むことなくひとすじの川となり、この二つの滝へといっきに



流れ落ち、マセード川となって下っていく。岩山のため保水力はまったく無く、夏になれば水はずっと減り、滝のいくつかは流れを止めてしまう。そして秋冬に滝を見ることはない。凄まじいばかりの滝は今が最高だ。この凄まじい滝を写真にできるかはまた別だ、光のことや水煙でレンズがぬれていればファインプリントは難しい。私はこの激しさにあきれてしまった。下で待っている古川氏も気になってきた。我々は2時間以上もこの周辺にいたことになる。帰り際に振り返ると滝に光が差し込んでいた。ちょうどキャンパーが動き出す時間で、多くの人々が登って来た。

ヨセミテ・ビレッジにあるアダムス・ギャラリーにやってきた。ここはもともとアダムスの奥さんだったバージニア・ベストのお父さんが経営していた写真スタジオで、アダムスがバージニアと結婚してしばらくしてアンセル・アダムスギャラリーと名前を変えた。現在は息子のマイケル・アダムスの奥さんジェーンが管理していると聞く。強い光の中で白地に黒のアンセル・アダムス・ギャラリーと書かれた看板は大変印象的で、アダムスがこれまで築き上げてきた白黒写真の世界を強く印象づけている。内部は、以前とくらべカウンターの位置が違っているだけで、大きな違いはない。30点ほどの作品に照明が当たり、久しぶりに本物の写真を見た。ヨセミテにいながらアダムスの写真を眺めるのに多少の違和感を感じてしまう。カメラは簡単に撮れそうな装置でありながら、印象深い写真にするには時間と忍耐、そして、感性を必要とする。一連の写真からそんなことがよみとれた。プリントを手に入れることも今回の目的で、皆真剣に眺めていた。同じイメージが何枚も用意されていて、白手袋のスタッフが一枚一枚照明にかざし、購入者がチェックするようになっている。150ドルで手に入るのだからコレクターをはじめ写真を勉強するものにとって大変ありがたい。私は同じイメージを何枚かもっていて、それには理由がある。プリンターは助手だったアラン・ロスがいまでもプリントしているが、印画紙はそのつど違っている、‘77に購入したときはドイツのブロバイラ、次がニューシーガル、そしてイルフォード、今回はまだよく分からない。ニューシーガルVCかもしれない。色調、コントラスト、明るさも違っている。こういうプリントの違いも楽しみの一つなのだ。ギャラリーには民芸品や写真集、そして多くのカラープリントが展示してあり、若い作家に開放しているのかもしれないが、作品と呼べるものはわずかだ。

アダムスのサイン入りのプリントが2点あった。複雑な教会の外観を見事に一枚の写真に．凝縮して見せてくれるイメージで、ポラロイドのタイプ55 で撮った写真。サイズは半切、値段は＄18,000になっていた。また6X6でとった8X10のプリントは＄825になっていて、いずれも本物のコレクターしか手がでない。

ヨセミテ・スペシャル・エデイションは、アラン・ロスがカーメルにあるアダムスの暗室でプリントしているものと思われ、一度に何枚プリントするのか見てみたいところ。研究会としてアダムスの暗室を一度見学することも考えてみたい。

6／3　車のガスは半分を切っていた。ガスは半分になったら入れるのが鉄則で、我々はロッジの近くにあるガスステーションと公園の中にあるガスステーションを予定していた。ところが両方とも閉鎖になっていた。その理由は環境問題らしい。地図を見るとロッジのあるエルポータルも国立公園の一部になっていて、理由は同じだろう。そういえば道路のアスファルトをはがしていたのは車を減らすためのものなのか。自然保護に関わっていたアダムスは、多くの車が入り込むことに我慢できず、元に戻すことをさかんに提唱していた。車はどんどん高度を上げ、やがてヨセミテ渓谷が眼下に広がるタイオガ・パスの入口にやってきた。心配したガスもこの別れ道にあって、多くの車が順番待ちをしていた。ここもカード差し込み式のセルフスタンドになっていて、私は待って

いる間に機械の操作を若いドライバーに訪ねた。いつの間にか我々の車もずいぶん汚れていて、窓をふき、水を補給した。私はホテルに電話するため皆から集めた 25 セント硬貨を握り、一台しかない公衆電話に並んだ。リーバイニングまで 1 ドル 25 セントで 3 分だと交換がいった。電話に出た年配の女性は私の名前では予約確認ができないという、遠くでキーボードの音がかすかに聞こえしばらく沈黙した。私は Arai Takashi で再度確認するようにいった。電話はそこで切れてしまった。私の後ろには 5 人ほど電話を待っていた。

ルートの両側は針葉樹林になっていて、道路から林の奥くまで雪はまだかなり残っていた。この雪解け水がやがてヨセミテ渓谷にあるいずれかの滝になって落ちていくのだとすぐに想像できた。それは、この山頂の傾斜のはるか向こうにハーフドームが見え、その下がヨセミテ渓谷だからだ。所々に沼や池が見え、また山火事の跡もあり、ゆっくりロケーションすれば撮影ポイントはたくさんあるにちがいないと思った。車のスピードを少し早め、我々はテナヤ（インディアンの酋長の名前）レイクをめざした。アダムスやウエストンが被写体としたあの神秘的な湖のことだ。湖は雪解け水を満々と湛え、道格にあふれんばかりで、巨大な岩山が正午の強い光線と雲一つない青空を背景に、圧倒的なスケールで我々に迫ってくる。それだけにここにはアダムスの写真のような神秘的なイメージのかけらもない。せっかく風景に立会いながら、私は心の中で何か失うものを感じてしまった。アダムスの写真テナヤレイクに出会ったのはもう 20 年も前のこと、その思いをずっとひきずってきた。そして、もしここで神秘的な光景を待つとしたら途方もない時間を必要とするだろうし、アダムスは 1946 年にこのテナヤレイクを撮っている、すでに環境は大きく変わってしまっている。過去から現在そして未来に渡る時間の思いが一気に私に迫り、カメラをセットし、ただ茫然と眺めるだけだった。

トウォルム・ミドーまで下ってレストランをさがした。時期が早すぎて、どこのレストランも閉まっていた。しかたなく、少し前に見つけたテント張りの雑貨屋に入り、サンドイッチ、ハンバーガー、そしてコークとそれぞれ好きなもので昼食にした。すでに 2 時近かった。この周辺は遮るものは何もなく水たまりや草のある湿地帯が広がっていて、遥か彼方に残雪の山が連なっている。まさかそこまで延々に湿地帯とは思えないが、所々の低い丘や岩がその先をあいまいにしている。柵はなく入ろうと思えば入れなくないが、途方もない広さに目的もなく入ることに自然にブレーキがかかる。我々は少し先の樹林帯の中の川や池をさがした。水は激しく流れ、川というより洪水に思えた。樹林帯に強い光線が差し込み、明るくはあるが撮影するには光は強すぎた。私はカメラをかついでうろうろしていた、カメラをもってこのまま歩き続ければどこまでも行ける、そんな気にもなっていた。遠い日本からわざわざやってさたといった感覚はもう消えていた。

ヨセミテが多くのアメリカ人の共感を呼ぶようになったのは、一人の詩人がいた。

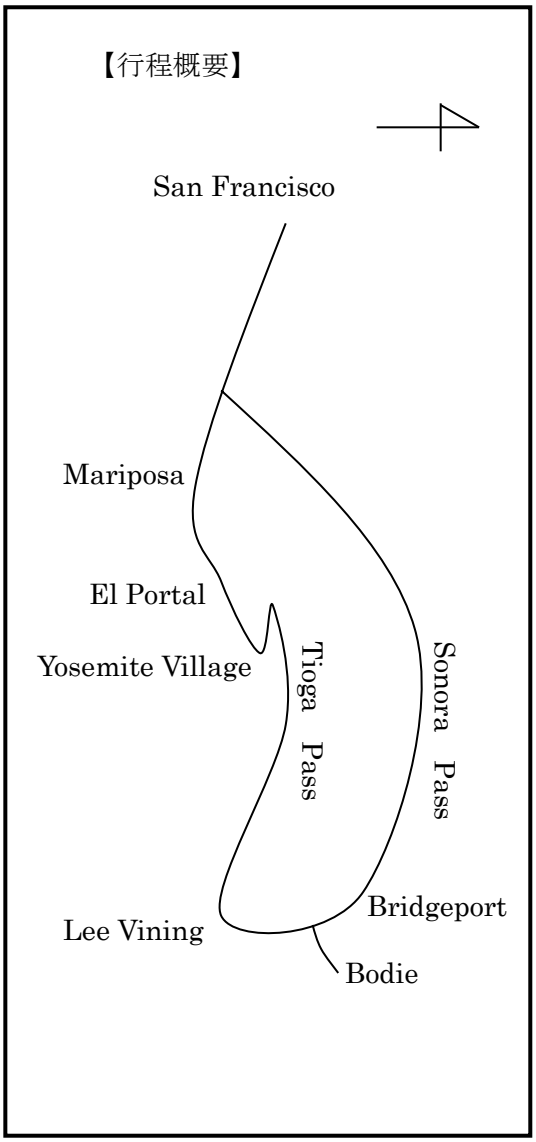
ジョン・ミュアである。彼は 1868 年にスコットランドからやってきて、”すべてがワイルドな場所はどこか”訪ねた。それ以来シエラネバダを探索し、人間と自然の愛すべきものがたりを書き続け、やがて 1890 年にヨセミテが国立公園になる大きな力にもなった。そして 1892 年にはシエラ・クラブを創設し、初代の会長になっている。後に、アダムスは夏になるとシエラ・クラブのガイドとして働いている。
彼の詩や文章は人々にある感情を強く起こさせるものだったようだ
“The clearest way into the universe is through a forest wilderness.” John Muir

ヨセミテ公園の東の端、タイオガ・パスにようやく着いた。ここにはレンジャーステーションがあって、始めて料金を払った。ここから公園と別れ、この先はモノ・レイクのあるリー・バイニングになる。限下にはタイオガ・レイクが見え、沈みかけた太陽の光が反射して印象的だった。我々は車から降り、来た道を振り返った。アスファルトの道と樹林帯の向こうに真っ白なマンモス・ピークが見え、広大なシエラの山並みを横断してきた満足感に、我々はしばらく立ちつくしていた。

我々は暗くなる前に坂道を下りたかった。坂は長く急で、右側はガードレールのない深い谷になっていた。遠くにモノ・レイクが見えた。名前のとうりコントラストはなく、見るからに写真になりそうもなかった。しかし、アダムスは 1947 年に柔らかな雲が湖面に反射したすばらしい写真を撮っている。また、ここリー・バイニングには息子のマイケル・アダムスが運営するモノ・インというレストランがあるが、場所は分からなかった。ちょうど西部劇に出てくるような小さな街で、赤いネオンのバーがあり、レストラン、ホテルがあった。200m も歩けば街はなくなってしまう。手入れされた緑の芝が、淡いピンク色の我々のロツジと実によく調和していた。カウンターの年配の女性が、電話が途中で切れてしまったことを気にしていた。

次号へつづく

中島　秀雄



『ヨセミテ企園撮影ツアー』雑感

2000.6.24

①クル ー　リーダー・中島秀雄先生、古川翔士、松本ひさ子、山下誠一、木下威各会員。

②日程　7 日間（00／6／1～7）

③現地交通　AVIS レンタカー（中島・山下）／走行＝1300Km

④行　程　（概要）

◇ 6／1　13：00 成田空港集合、15：45 出発（NW028 便）→8：30am. San Francisco Int′1. 空港着→11：20am. AVIS レンタカー手続き・出発→12：00 Liver more（風車発電と牧場の丘）→12：30 Tracy→16：40 Mariposa（アダムス作品の裁判所／教会の建物）→19：30 YOSEMITE NATIONAL PARK（公園内一周のロケ）→21：30 EL Portal（Cedar Lodge 泊）

◇6／2　6：00am. Cedar Lodge 出発～7：00am. Curry Village＝バーナル滝、ミラーレイク、ハーフドーム、Yosemite Village＝アダムス・ギャラリー、18：00 Tunnel View～Half Dome, EL Capitan, etc. の眺望、20：00 ヨセミテロッジ、→22：00 EL Portal（Cedar Lodge 泊）

◇6／3　6：00am. Cedar Lodge 出発～7：30am・Merced River（流木風景）→9：00am. Merdows →Toulumne（焼け山の縞枯風景）→10：00am. Tioga Pass→11：50am. ホルムス ステッド→13:00 テナヤ レイク、タルミナ・ミドー、Endless Winter→《16：00 Lee Vining》→17：00～（湿原・Ellery Lake の湖水風景）→20：30 Lee Vining（Best Western　Lake View Lodge 泊）

◇6／4　7：00am. Best Western View Loge 出発～7：30am. Conway Sommit→9：00am. Bodie(Hist.Park・廃屋風景)～18：00→19：00 Bridge port（Best Western Ruby Inn 泊）

◇6／5　5：00am.～（早朝の小さな町並散策）9：00am. Best Western Ruby Inn 出発～10：00am. Twin Lakes（Eagle peak 眺望）→12：00 Sonora Pass（峡谷と蛇行の川）→14：30（SIERRA NEVADA 山間道路直下降）→16：30 Strawberry →17：40 Tracy（風車発電と牧場の丘）→18：30 BAY BRIDGE→19：00 San Francisco 帰着（Best Western Civic Center Motel 泊）～21：30 市内散策

◇6／6　7：00am. タウンウォッチ～10：30am. Best Western Civic Center Motel 出発→11：30am. AVIS レンタカー手続き→12：00 San Francisco Int´1.空港着、14：00 出発（NW027 便）→帰国《国際日付変更線・通過》

◇6／7　17：10 帰着～17：50 空港ロビーで解散

⑤ツアー経費概算　　￥170, 000. －／行動諸費（除・食料費）

2)、ツアー雑感

（はじめに）

まず最初に、このツアーが効果的に実行できるよう内容の吟味、旅行関係先との交渉・手続きなど事前準備に万端お世話くださった企画担当の荒井幹事さんに感謝申し上げます。また大変ハードな行程を終始、綿密なチェックと細やかかつ適切にアドバイスしてくださったリーダーの中島先生に厚く御礼申し上げます。そしてこの企画を支えてくださった会員皆様のご支援に感謝申し上げます。お陰さまで全員仲良く無事に計画通り実行できて目標の達成感も得られました。ここに心から喜んでご報告申し上げます。

※※※

5 月 23 日 18：30、武蔵小杉駅のホテル・ザ・エルシーにて 3 時間におよぶ結団式？があって、ようやく旅立ちの実感が湧いてきました。参加できなくなった荒井幹事さんから旅行手続きと内容

の説明、また先生からはツアー・コースや立ち寄りポイントについてマップ・シミュレーションがありました。必携用品の確認なかでも一番の関心事は携帯する生フィルムの保全対策でした。「単独手持ち」と「ハンドチェックプリーズ！」が結論となり、共通の決め手と言うわけです。一週間後の旅立ちに備え、互いに体調維持を誓って別れました。

※※※

6／1＝NW028 便／15：45 成田出発～機中では古川さん（ビジネスクラス）の消息は定かならず。その他大勢は殆ど仮眠程度で、フライト約 9 時間を経て太陽がギラギラする朝（9：10am）のサンフランシスコ国際空港に無事到着。通関後、まずは足の確保が第一とレンタカーAVIS の在りかを探ること 30 分、すっかり目算がはずれて、第一関門は 3 マイルも離れた空港外のレンタカー村までシャトルバスで移動となった。レンタカーオフィスセンターの AVIS 事務所で受付後、キーをもらって立体駐車場（AVIS の 3F）へ。所変わればシステムも合理的？不親切？何せ、当該車の操作方法については“取説熟読”という訳。と～んと分からず手間取ったのがヘッドライトのつきっぱなしである。さすが明暗自動感知のスグレモノ！であるらしいことにして、いよいよルーレットのように流れる西海岸の大動脈、右側走行の別世界へと参入した。さてハンドルは外車慣れ！の先生にお捌きいただき、運転助手？に抜擢された山下さんが前席に対峙して緊張感は絶高頂！？、ドライバーから発する矢継ぎ早のオーダーに見慣れない標識と持参マップ（＝虎の巻）とのニラメッコ。その他の客席ではクルー最長老の古川さんと気楽な随行員の木下プロ？、そして早くも最後部席はレディースコーナーとばかり紅一点の松本女史が侍るという図になって粛々とヨセミテ方向に進行。さしづめ、山岳部隊の風情よろしくザックの山積み車は幾つかのハードル（＝ジャンクション）を次々こなして行く。やがてリバーモア R580〈＝風車発電のある丘、スプリングヒル〉にさしかかり、息抜きも兼ね最初のシャッターチャンスとなる。見渡す限り、牧場の丘。ここに林立した風車群は壮観そのものであった。《花よりダンゴ！近くの FR で昼食となる。》⇒本格的撮影着地点はアダムスが作品にしたという静かなマリボサの町。リーダーのガイドで裁判所や教会に立ち寄る。ピントグラスには鮮やかな緑の芝庭に包み込まれた純白の建物、これに残照が注いで高い木立の陰が揺らぎ、モノトーンの味合いのある貴賓ある絵であった。彼の町マリボサにはレストゾーンのたたずまいがあって雰囲気がよく、誠に印象的だ。⇒これよりさらに 22 マイル走って、ヨセミテ入り口の町エル・ポータルに着く。チェックインもそこそこに明日のロケとイメージアップのためと一路ヨセミテ渓谷を突っ走る。仰ぐ山頂に夕陽がかかり、スレ違う対向車にライトが灯る中、センチネルブリッジやプライダルベイル滝など大地の容貌を一望できるビューポイントを一巡、感動また感動の連続である。一同には十分過ぎる意識高揚となって、さすがリーダー！と感心することしきり。このころヨセミテビレッジは人影も閑散となり、閉店真近いお店に駆け込んでの朝食対策。21：30～無人になった公園ゲート《クローズタイム 22：30～6：30am.》は料金無料で抜け出る。宿舎へ。ようやく夕食にありついたのが 21:50～“セダー・ロッジのスナックバー”でピザパイ、地道なメーンディナー？ながらボリュームはいっぱいでお残しアマタ。そこは中年クルー、テイクパックにして…。

6／2＝6：00am・セダー・ロッジ出発、ヨセミテ公園へ。閉鎖道路の開門を待つ車が縦列 1～2km？。この間、車中朝食。今朝からハンドル捌きは満を持して山下さんが登場。樹林帯をくぐり抜けるカーブまたカーブの道路、随所に鋭い陽光が差し込む。まるでプラズマの目潰しを食らったように視界が暗転する。さすがサファリーのドライバーも「走れない！」それでもアチラ車はここぞとビュンビュン走り抜いて行く。客席の御仁一

行は車窓に映し出されるマーセド河周辺の美しい光景に驚愕しきり。強大な三段岩（スリーブラザーズ）の頭上部には朝光を受け、鍛帳を垂らしたような壮大な花崗岩の壁、カミソリで削り切ったような氷河期の爪痕？がクッキリ。まるで“岩の雛”みたいに一筋一筋浮き彫られた絶壁がスゴイ。アッと言う間にキャリービレッジの駐車場に到着。はや、先行の車々で満車に近い。⇒バーナル滝を目指して約 3km のトレッキングコースにアタック。「BEAR WORNING」の立て看板を横目にキャンプ村がくり広がる。辺りはアメリカ松の大木群落があって、まるでウミガメの背模様のような木肌に度肝する。神秘性と偉容さを誇るヨセミテのシンボリイックなハーフドームがすぐ頭上に覆いかぶさってくる。道程半ばで小休止が入る。このころ、写真家は三脚とカメラの荷重に泣く。やがて鈍い滝の雄叫びが感じられる地点に至ると、壮大かつ急峻な渓谷の光景が一挙に絵心をかき立てる。バーナル滝だ。おもわず、「ウワオー！」と叫び返した。4～500m 先の滝壷から轟々と階段を駆け降りるように流れ落ちてくる雪解け水。広大な谷間の隅々まで水しぶきが上がり、遅ればせの朝日がそれをライティングアップする。自然が醸し出す一大ドラマだ。もう夢中で見事な一瞬を追う。レンズを拭き拭きシャッターを切る。足下にも光が回って、一段落して驚いた。可愛いスクワイアル（＝リス）たちがチョロチョロにじり寄ってくるではないか!日本じゃおよそ見られない光景である。ここはアメリカ。なんと幸せな一時か。時に古川さん、このトレッキング途中で辞退され、キャンプ村周辺をじっくり撮影されながらお待ちのはず。リーダーの先生にはいたく気掛かりなこと、昼食時間までには合流を・・・とスタスタ下山。⇒果たして 13：00～キャリービレッジのカフェテリアでの昼食となり、ミニコークとスモールサイズのミックスピザ！となる。またしてお残しはテイクパック。ピーカンの昼間はヨセミテビレッジの散策タイムとなる。目玉はアダムスギャラリーでの作品鑑賞とオリジナル写真の入手。大自然をビジュアル化した大アーチスト、アンセルアダムスの名作の数々を鑑賞して興奮冷め止まず。一同、是非の記念にと惹かれたように数あるオリジナルプリントの中から好みを選び出すことしばし没頭。⇒聳え立った岩と大いなる森が織り成す風景に夕陽が馴染むころ、撮影活動再開の号令。立ち枯れの大木、アメリカ松、激しく洗いさらされる流木などなど前日ロケの撮影ポイントをこなす。光のゾーンシステムもさることながら、時間の圧縮テクニックはないものか？等と腹時計を感じながら余計なことを考えたのは筆者だけか。今夜こそは！とリーダーの旺盛な意気込みにつられて早々とヨセミテロッジレストランに駆け込む。《昨夜はシャットアウトされてうまいステーキにありつけず！》

次号へつづく

木下　威

人物撮影会　　（大倉山記念館）

風景写真を得意としている我々は、日頃積極的に人物撮影に取り組めていない。アダムスやウエストンの写真を見れば、風景を撮ると同じ様に人物をとらえている。そして、魅力あるトーンによってプリントされ、そこから人物の魅力も伝わってくる。どうしたらこんな人物写真が撮れるのか！

今回のモデルは内田氏の友達の岩井さんと、私の友人の友達のアメリカ人ロバートにお願いした。岩井さんは研究会の展覧会に何度も来ていて、皆と食事をしたこともあり始めてではない。休日ということもあり人の出入りも多く、また記念館が人物撮影、とくに女性にはイメージとして多少固かったかもしれないと思っている。二組に分かれて交代で撮影することになった。ロバートはモダンダンサーでもあり、すらりと伸びた長い足と彫りの深い顔立ちが特徴で、モデル経験もあることから一度ポーズを決めると 1／2 秒でもシャッターは十分だった。岩井さんの表情にもしだいに固さがとれ、大きな目にいつものやさしさがもどっていた。4X5 あり 6X6 あり、いろいろ注文もあってモデルも大変だったと思います。

我々のテーマは人物撮影であってモデル撮影ではない。いわゆるモデル撮影とは規格にそって訓練された専門のモデルがいて、アマチュアが撮影したり、プロがコマーシャルで撮影したりする。我々のような人物の自然な表情や背景をトーンの美しさとして見せるのとは違っている。また、

スナップによる人物撮影とも違う。

人物撮影の手順として、最初は人物にどこまで自然に打ち解けられるかがキーになると思う。そこから人物の魅力も見つかり、背景を捜しカメラワークになっていく。背景を先に見つける場合もある。フレデリック・ソマーの写真に大変有名な少女の写真がある。彼は大変気になる背景を見つけ、その背景に合う少女を捜していた。しばらくして、この背景しかありえないぴったりの少女を見つけた、といっている。こう考えると撮影会には限界もあることが分かる。しかし、手順の一つ一つに経験や訓練も必要で、今回もいい経験になった。

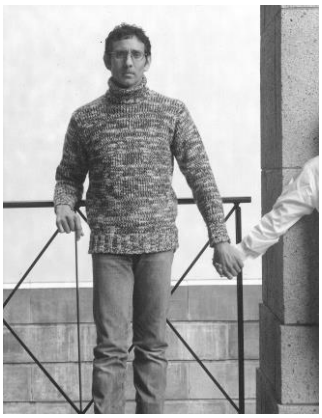
参加者の動きを見ていると、カメラ操作にもう少し手慣れる必要を感じる。私は一度ピントを合わせたらシャッターを閉め、フィルムを装填して引きふたを抜き、レリーズをもってモデルの表情を捜す。

ここまでの操作を手早くやると気持ちに余裕ができる。モデルの多少の動きは絞りでカバーしている。

操作は短時間に、そして、モデルとのコミュニケーションに少し時間をとるのがよいだろう。そして、ポラロイドで確認するようにしている。私の経験ではポラロイドは新鮮なものがよい、どうせ

テスト撮影だからといって期限切れなど使うとがっかりするだけ。また、撮影した結果はかならずプリントにすることが大事で、プリントにしない以上写真ですらない。
風景ばかり追いかけていると急に人物写真が撮りたくなる。街で、会合などの集まりで、ギャラリーで多くの人に会ったとき、写真に撮りたいと思う人に巡り会うときもある。しかし、写真にしてがっかりするときもある。この辺が人物写真のおもしろいところで、ここには様々な感情の行き違いがあって、恋愛にも似たようなことがある、美人がかならずしもやさしいとはかぎらないように！！
　風景写真を撮るときのように、開放された気持ちで、人物に接して行けば、必ず成功すると思うのだが。これからもチャレンジすることにしましょう。
中島　秀雄

参加者・菅野、大澤、内田、山下、宇野、木下、玲木、松本、佐伯、藤枝、古川（敬称略）中島



吉野光治郎さんの死を悼む

吉野さんが３年前に脳梗塞で倒れたことは皆様にはご存じのことと思います。その後懸命にリハビリに励み、かなり回復し、車椅子や杖を使って自宅で生活されていました。私を含め役員の何人かが何回か自宅に伺い、ずいぶん元気になってきている様子を見ていました。その様子は例会などを通して皆様には伝えて来ました。私は吉野さんの様子を見ていて、近いうちに撮影会は無理としても一年に一度くらい例会に参加してくれたり、写真の話くらいはできるようになると思っていたし、またそう願っていました。そして、今年もヨセミテ撮影会の前に伺う予定にしていました。

ちょうどヨセミテ行きの準備に追われているときに山本さんより電話があり、その後、吉野さんの訃報のファックスが入りました。

吉野さんは研究会の発足当初から会には積極的で、企画から研究会の運営まで幅広く力を発揮していただき、また会員のまとめ役としても適任で、巧みな話術と行動力に私は大変ありがたく思っていました。

第一回研究会展覧会では、その準備や仕上げのために自宅の居間を開放していただき、終わったのは深夜を過ぎてしまうときもあったりで、少し無理しすぎたと気にしたこともありました。奥様も大変優しいかたで、夕食をご馳走になったことも忘れられない思いでの一つです。

笑顔を交えて研究会の将来のこと、新しい機材、テクニックに対して熱心に語るその表情からは、情熱とやさしさに満ちていたと私には感じられました。

研究会にとっても私にとっても大変残念でなりません、これからは吉野さんの研究会に対する熱い思いを無駄にすることなく、頑張っていかなければと思っています。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

尚、5 月 8 日のお通夜には山本、内田、石原と中島の 4 人が参列しました。

研究会代表　中島秀雄

Information

【売ります】

中島秀雄

１．評論集“フォトグラファーズ”飯沢耕太郎著　（作品社）
定価３５００円⇒３０００円（まちがって２冊買ってしまったもの）

２．EL ニッコール　８０mm5.6　新ケース付
定価１９１００円⇒９０００円

【欲しい方、さしあげます。】

中島　秀雄

〔暗室用品〕

- イルフォード・マルチグレード・フィルターのみ
- イルフォード・マルチグレード・フィルター・セット
- フットスイッチ
- ガラス・ネガキャリア 6×6（２個）
- ガラス・ネガキャリア 35mm
- 4X5 フィルム現像用ラック＆タンク
- 135mm現像タンク（キング）
- ステンレス環像タンク 120 用
- ステンレス環像タンク 135 用
- NOVA プリンター・システム 8X10 (2 槽式)
- 暗室用ダーク・カーテン
- キング・エアー・ドライヤー230　RC ペーパー乾燥器
- シート・フィルム乾燥クリップ（24 個）
- プロジェクション・プリント・スケール

〔撮影用品〕

- 自由雲台　6X6 以下
- コンタックス・レンズ・キャップ 46mm GK-41（３個）
- コンタックス・レンズ・キャップ 55mm　K51
- コンタックス・ボディー・キャップ GK-B
- ピーク・モノトーン・ビユーアー　グレー
- ピーク・モノトーン・ビユーアー　アンバー
- 機械式セルフタイマー
- リコー超ミニ三脚
- ホースマン（4X5）ピント・フード
- 超小型ストロボ（ヒカル小町）（２個）
- ストロボ（スレーブ）GN.20
- ミニ・ストロボ GN.8
- ブロニカ・蛇腹フード
- ニコン・フード HN－20
- 空気レリーズ
- ダーク・バック小
- ダーク・バック大
- ライカ専用ハード・ケース　茶

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。
今回より編集担当が、篠原から荒井に変わりましたので、今後は以下へ投稿願います。
なお、写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。
パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしくご指導ください。
また、今まで同様、手書き原稿は原則として受け付けませんので、ご了解ください。

荒井　崇